

世界中の演劇人が注目する、
この顔ぶれが実現

エレンディラ

erendirra

原作

ガルシア・マルケス

音楽

マイケル・ナイマン

演出

蜷川幸雄

マルケスの土着世界が
蜷川をインスパイアする

シェイクスピア、ギリシャ悲劇、清水邦夫。蜷川幸雄が手がけてきた戯曲の、たぶんこれがベスト3になるかと思う。蜷川が初めてガルシア・マルケスに取り組むと聞いた時、かの南米の作家と演出家との共通項をイメージするのに役立ったのは、この中では清水邦夫。それに『身毒丸』や『草迷宮』の作者である寺山修司など、なぜか日本の作家のほうだった。

それは『百年の孤独』に代表されるガルシア・マルケスの、現実と非現実が縋り交ぜになったラテンアメリカ独特の世界観のせいかもしれない。「魔術的リアリズム(マジック・リアリズム)」と呼

ばれるその作風は、「非現実」部分がただの空想や幻想なのではなく、その土地の言い伝えや民話など、土着の風習や文化を背景にしているのが、大きな特徴といわれる。西欧の合理主義的発想では解析不可能な超常現象が当たり前のように起こり、かつ、それを極めて客観的に叙述するその文体には、読んでいて度肝を抜かれると同時に、そこはかたく懐かしさも感じられて痛快だ。

北陸出身の清水邦夫や、東北出身の寺山修司も、故郷の幻想を背負う作家という点では、通底するものを持っている。清水は昨年再演された『タンゴ・冬の終わりに』(1984年初演)に代表されるように、よく自身の出身地を彷彿とさせる北の町を舞台に選び、あいまいな過去と現実の狭間で、主人公を狂気に陥らせる。寺山は、郷愁漂う「見世物小屋の復権」を標榜し、まやかしとあ

蜷川幸雄があな南米を代表するノーベル賞作家ガルシア・マルケスの『エレンディラ』に取り組む。更に、音楽は『ピアノ・レッスン』などの映画音楽やオペラなどで知られる、現代有数の作曲家マイケル・ナイマンが手掛ける!となれば、これはもう否が上でも期待が高まるというもの。マルケスのぬめぬめと引きこまれるような美しき闇の世界を、蜷川はいかに官能的に描き出すか。ナイマンの音楽はそれをどう彩るのか。今年、必見の話題作だ。文・伊達なつめ(フリーライター)

やかしの世界を展開させて、観る者の常識を揺るがせ続けた。近代の理性とは別次元の水脈を、秘めた清水と露わにした寺山。方法は異なるけれど、ともに分かちがたい望郷の念が、創作につながっているタイプだ。蜷川とガルシア・マルケスの組み合わせに親和性と期待を感じるのも、蜷川による清水や寺山作品の鮮やかな具現化を、幾度となく目撃してきたからだと思う。

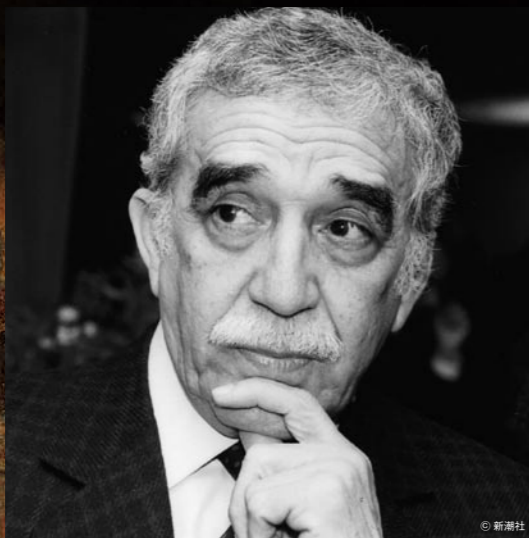
ナイマンの音楽で起こる
予想もつかない化学反応

無垢な美少女エレンディラと、彼女に娼婦をさせる無情な巨漢の祖母、そしてエレンディラに恋する青年ウリセスの物語『エ

レンディラ』。脚本の坂手洋二は、ウリセスを原作よりさらに神秘性を増した人物として登場させ、エレンディラがウリセスを残して疾走する結末には、眩惑的で神々しいラストシーンを加えて、独創的な劇的宇宙を構築している。それはまるで、蜷川がどんな風にこの夢のようなシーンをビジュアル化してみせるのか。その美意識と演出力を見込んで、坂手が思い切りイマジネーションを奮発してみせたかのようだ。

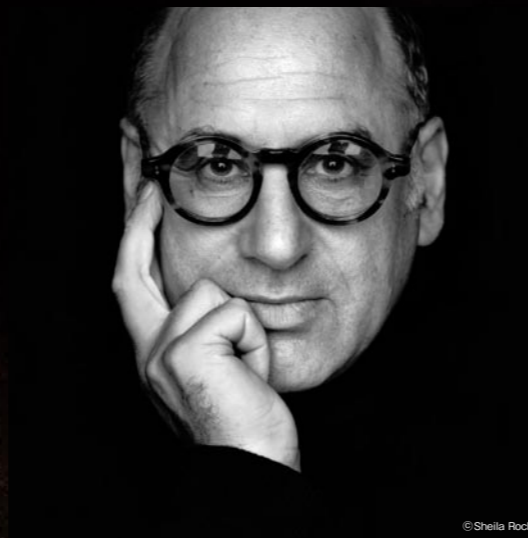
こうしたラテンアメリカと日本の土着性に、「理知」をメロディー化したと言っても過言でない、研ぎ澄まされたマイケル・ナイマンのオリジナル音楽が加われば、予想もつかない化学反応が起きるであろうことは、想像に難くない。世界中の演劇人がこのコラボレーションに注目するのも、無理のないことだ。

García Márquez × Michael Nyman × Yukio Ninagawa



ガブリエル・ガルシア・マルケス 原作

1927年コロンビア生まれ。現実と幻想の世界が渾然と表現される「マジックリアリズム」の旗手として、多くの作家に大きな影響を与える。特に、1967年に発表した長編『百年の孤独』は世界中にセンセーションを巻き起こした。1982年にノーベル文学賞を受賞。全小説集の刊行が新潮社から進められるなど、現在の魅力が改めて見直されている。



マイケル・ナイマン 音楽

1944年ロンドン生まれ。音楽評論家でもあり、特定のフレーズを反復させて作られる音の波をつなげ、その中で徐々に音楽を展開していく「ミニマル・ミュージック」の作曲家でもある。また、『ピアノ・レッスン』『髪結いの亭主』などの数多くの映画音楽も手がけるほか、自ら『マイケル・ナイマン・バンド』を率いて演奏活動も行うなど、幅広い活動を行っている。



蜷川幸雄 演出

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年4月には「さいたまゴールド・シアター」の活動を開始。6月には、イギリスでのRSC主催ザ・コンプリートワークスに日本で唯一招待され「タイタス・アンドロニカス」を上演し、絶賛を浴びた。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。(財)埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

STORY

過失から祖母の家を全焼させてしまった少女エレンディラは、その責任をとるため、祖母により、娼婦として1日に何人もの客を取らされている。その美しさから、瞬間に男達の人気を集めていたエレンディラだったが、ある時、彼女は本当の愛を誓う美青年ウリセスと出会う。2人は祖母からの脱出を試みるが、あっさりつかまってしまふ。祖母から逃げるには彼女を殺すしかないと考えた2人は、それを実行しようとするが……。

蜷川幸雄演出 見世物祝祭劇

『エレンディラ』 **NEW**

砂漠に吹く風、男達の行列、人々が広場に集まり、祭りが始まる。その時、世界の中心で待ち望まれた奇跡の娘が現れる。その名はエレンディラ。

【日時】8月9日(木)～9月2日(日)

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【原作】ガルシア・マルケス

【脚本】坂手洋二 【演出】蜷川幸雄 【音楽】マイケル・ナイマン

【出演】中川晃教 美波 國村隼 遠川哲朗ほか

【チケット(税込)】S席12,000円 A席7,000円

【発売日】一般4月14日(土)

※メンバーズプレオーダーに関しては、詳しくは同封のプレオーダーシートをご覧ください。